

龜井勝一郎全集

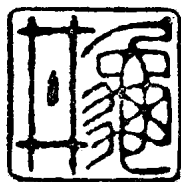
第八卷

龜井勝一郎全集

第八卷

講談社

龜井勝一郎全集 第八卷



昭和四十七年二月二十日 第一刷発行

定価 一五〇〇円

著者 亀井 勝一郎

発行者 野間 省一

発行所 東京都文京区音羽二一二二
株式会社 講談社

郵便番号 一二二

電話 東京〇三(郵)二二二(大代表)
振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本は

お取り替えます。

© 亀井 勝一郎 昭和四十七年

Printed in Japan

0395-135083-2253 (0)

(文1)

龜井勝一郎全集
第八卷

第八卷
目次

私の人生観

人間とはなにか……………一五
矛盾にみちた危険なもの……………一五

信ずるに足る唯一の幸福……………二〇
最後の心……………二四

歴史の星々

無常観……………三
無常と風流……………三
無常と死……………元

無常と罪……………四
無常と流転……………五
無常と現代……………六

生死の思索

——歎異鈔のこころ——

危機と信仰	七	信従の心	二二
現代人と宗教	七	病める者の自覚	二六
人間とは何か	八	生死の思索	二三
鎌倉仏教の先駆者たち	八	邂逅による開眼	二三
人師への邂逅	九	生死についての思索と体験	二四
沈黙から生まれる信仰と愛と	三	柔軟心・微妙心	三三
人間と罪の問題	六	論証と身証	三四
人間を見る明晰の眼	六	伝統と情性	三五
善と悪に関する思索	七	滅びの自覚	三七
絶望のはてに	一六	新しい宗教改革の時代	三六

日本人の美と信仰

日本人の美と信仰	一四七
仏像に心をひかれた出発点	一四七
仏像に接する五つの違つた気持	一四八
精神の古墳を発掘する努力	一四九
信仰の第一義の道は一体何か	一五〇
古代における文明開化	一五二
日本人の美意識	一五三
なぜ仏教を受け入れたのか	一五五
恐怖から脱出しようとする祈り	一五五
人間は果して救はれたか	一五七
鎌倉時代の宗教改革	一五八
信仰と美意識の矛盾	一五九
密教型思考	一六〇
流離型思考	一六二
博物館の問題	一六三
博識の敗北	一六四
理解のための五つの要素	一六五
仏像と復原力	一六六
日本人の文学	一六八
日本民族の変貌期	一六九
明治の精神的支柱	一七〇
信仰との思想的対決	一七一
日本の伝統との対決	一七二
内村鑑三・森鷗外・正宗白鳥	一七三
日本人の伝統的精神の特徴	一七五
キリスト教について	一七六
太宰治・ゲーテ・トルストイ	一七八
内村鑑三の文学観	一八〇

拾遺

心の苦悩と対決する精神……………	一六
現代文学の諸問題……………	一八
日本人の思想……………	一九
日本が外来文化を受けた歴史……………	二〇
思想とはいったい何か……………	二二
思想はかういふ時に成立する……………	二三
思想家を生む基本的条件……………	二五

日本の文学を思想的に貧弱たらしめて ゐるもの……………	二七
罪の思想……………	二九
源氏物語の世界……………	三〇
いろいろな「思想」に直面して……………	三二
大宗教・大思想の生れる条件……………	三四

信仰の帰一と繊細な心（最近の感想）……………	二〇九
聖徳太子……………	二一〇
自我の超克……………	二一五
神と仏……………	二二〇
危機と救ひ……………	二二五
亡霊の対話……………	二三
生活と宗教……………	二三六

神はあるか無いか？……………	二二六
信仰の基礎としての人間……………	二二六
罪惡とは何か？ 宗教の敵は宗教自身の中 にある……………	二二九
人はパンなくして生くる能はず、人はパン のみにて生くるものにあらず……………	二三
救ひの無さ……………	二三三

わが遍歴における内村鑑三	二四七
危険な関係	二四九
常照我身	二五一
太子と罪惡	二五五
信仰は何故人生に必要か	二五七
明らかに見える	二六三
私の宗教観	二六五
現代人として	二六五
危険な関係	二七一
廻向と明晰	二七六
歎異抄について	二八三
宗教と文学	二八六
一 宗教と文学との対決	二八六
二 宗教家と文学者の相違	二八九
三 仏教と文学	二九三
四 戦後の宗教文学	二九六
信仰は人間を幸福にするか	三〇〇
邂逅と転身——人生の根本に在るもの——	三〇〇
人間内部への明晰——信仰の根本に在るもの——	三〇四

聞思と奉仕——幸福の根本に在るもの——	三〇八
近代文学と宗教	三一
思想は時代を作り民族を變へる	三一
優秀なポエジを伴ふ思想	三二
明治文学に影響した讚美歌	三四
古典を學ぶは青春を學ぶこと	三五
告白は自分を形づくると	三六
人間性を見きはめる自然主義文学	三八
自然主義文学は宗教への門をひらく	三九
つくりごとを認めない宗教の世界	三〇
日本の文学者は宗教的修行をする	三一
戦後には必ず襲ふ社会危機	三三
一つの立場に自分を限定しない	三四
有島文学に影響した罪の意識	三五
社交性をおびた宗教は墮落する	三六
人間が人間を審判することはできない	三七
知的好奇心と日本人の分裂症状	三八
思想的対決力が作品を基礎づける	三〇
日本人のバックボーンはなにか	三三

権力性を帯びた宗派は偽善者をつくる……………	三三
知識人の劣等感と歪められた優越感……………	三三
ヒューマニズムと仏教の役割……………	三四
求道と快楽……………	三五
人間性の本質にある二つの同時的答へ……………	三五
苦痛をともなふ快楽と苦痛なしの快楽と……………	三六
戦後における快楽の特徴と賭博的性格……………	三六
戦前における人間性の歪曲につながる現代 世相……………	三四〇
本居宣長の「もののあはれ」説……………	三四一
生きるための努力を省略しようとする傾向……………	三四二
はてしない快楽は人間の「空しさ」を教へる……………	三四四
死の自覚によつて快楽の本質を知る……………	三四五
快楽の追求に直面する罪と死の二つの問題……………	三四六
快楽への没入は文学のある性格と結ぶ……………	三四七
高い道徳をもつものが不道徳な自分を自覚 する……………	三四八
快楽を深めた人間が内部に求道精神を起 す……………	三四〇

宗教への無関心について……………	三五
思想的怠慢のはじまり……………	三五
宗教に近づくといふことは……………	三五七
仏教をめぐるつての感想……………	三五九
病者の自覚……………	三六四
宗教と文学（死をめぐるつて）……………	三六六
信徒と傍観……………	三六六
告白と虚構……………	三七四
近代化と死……………	三八五
欺異抄について……………	三九六
親鸞の語録について……………	三九八
信仰と言葉……………	四〇七
信仰と私……………	四一九
出会と開眼と初心について……………	四一九
宗教への無関心について……………	四二
信仰を語ることの困難について……………	四三三
開眼と救ひの有無について……………	四三五
宗教と政治的行為について……………	四三八
未来に関する妄想について……………	四三〇

入寂の年と誕生の年	四三
信仰と美について	四四
美術品の鑑賞	四四
矛盾の宗教美	四四
妄執の内的悲劇	四五
資料としては	四五
宗教についての十七章	四六
第一章 最も語りがたいもの	四六
第二章 言葉と信仰について	四七
第三章 思想的怠慢のはじまり	四六
第四章 明らかに見えてくる	四〇
第五章 罪と悔改について	四一
第六章 空想との戦ひ	四二
第七章 性の空想と死について	四四
第八章 現代病の診察	四五
第九章 自由といふ言葉をめぐつて	四六
第十章 信仰と未来性	四八
第十一章 情性のおそろしさ	四九
第十二章 政治と宗教	五〇

第十三章 共產主義への態度	五一
第十四章 美といふ誘惑者	五一
第十五章 危機に生きる心	五四
第十六章 人類の大矛盾について	四六
第十七章 人間の誕生	四七
宗教者の任務	四九
現代における信仰のあり方	四九
信仰はまづ自己の確立から	四九
信仰を実生活と結びつける	四〇
平和への実践こそ必要	四〇
罪を忘れることへの抵抗	四〇
憲法擁護は日本人の義務	四一
人間精神の腐敗への抵抗	四二
宗教者がまづ先頭に立つて	四二
非常識な現代の世界情勢	四二
心の中の絶望と懷疑に勝つ	四三
無知といふこと	四四
唐招提寺への道	四五
古寺巡礼の初心について	四六

時代と信仰の危機について……………	四七三	日本精神の宗教性……………	五五
信仰と言語表現……………	四八二	良寛が感動した仙桂の奉仕……………	五五
薬師寺への道……………	四八六	大組織宗団内の孤独と争ひ……………	五五
この道の上で思ふこと……………	四八六	信じながら殺すといふこと……………	五六
偉大なる白鳳……………	四八九	戒律がなければ自由もない……………	五六
講堂の夜の祭典……………	四九五	罪の美化と無常感への転化……………	五七
東塔の歌と仏足石の歌……………	五〇二	宗教と文学……………	五七
宗教と私……………	五〇五	人間と罪……………	五八
歴史のなかの恐怖……………	五〇五	一、「信仰」をめぐる三つの要件……………	五八
悠久の時間と瞬間……………	五〇七	二、乱世をみつめる人間親鸞……………	五九
無常観といふもの……………	五〇九	三、日本文学に現はれた人間観……………	五九
罪について……………	五一	四、法然の宗教改革……………	五九
音声と信仰……………	五三	五、罪の自覚……………	五九
自由と戒律……………	五四	六、親鸞の受動性と批判的精神……………	五〇
文学者の最後……………	五六		

私の人生観

